慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「政治学の科学化」の意味について
Sub Title	Concerning the scientific meanings of political science
Author	堀江, 湛(Horie, Fukashi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.5 (1969. 5) ,p.36- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690515-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「政治学の科学化」の意味について

堀江　湛

一

政治学の現状が果して科学の名に値するものかどうかは別として、政治学は科学でなければならないという点については、ほとんどすべての研究者の意見が一致するであろう。しかし「政治学は科学でなければならない」という言明によつて一体何を主張しようとしているのか、重ねてその意味を問うならば、いく種類ものおよそ異つた答えが返つてくることであろう。これは「科学」という名辞が、探究とその成果の正しさを保証する魅惑的な言葉として多くの研究者の心を捉えずにはおかないという心理的事実[1]と、それにも拘わらず、この名辞がかなり曖昧な集合を表象する言葉として使用されきたつたという事実にもとづいている。

一体、政治学の科学化という時そこでは何が主張されているのであろうか。その意味を確定するとともに、このような主張によつて政治学を一体どのようなものに仕立て上げようとしているのか、そもそもこのような試みは何のためになされなくてはならないのか、こういつた問題についてあらかじめ吟味しておくことは、政治学研究の手はじめとして是非必要なことと思われる。

二

「政治学は科学でなければならない」と主張される時、それがどのような意味で主張されていようとも、その背後に論者の共通の心理的事実として、あのコペルニクスとガリレオの時代に始まる近代自然科学の偉大な発展、その理論と応用との目醒ましい成果に対する驚嘆と畏敬の念の存在していることは否定できまい。もちろん、われわれは今日近代科学の真理が絶対普遍の妥当性をもつものではなく、経験的蓋然的妥当性以上のものを主張できるものではないことを知つている。イマヌエル・カント（Immanuel Kant）が自然的世界に妥当する絶対的真理と考えて、彼の壮大な哲学体系の基礎づけに援用したユークリッド幾何学とニュートン物理学はいずれも今日彼が考えたように絶対的なものではなかつたことが明らかになつている。

非ユークリッド幾何学の発見は、幾何学の主張しうる真理性とは公理から定理に至る数学的一般伴立的関係を証明する分析的真理にすぎず、公理自体の真理性は物理学の経験的論証にゆだねるべき綜合的性格のものであること、ユークリッド幾何学の公理はカントの考えたような自然的世界に対して普遍的妥当性をもつものではないことを明らかにした。(2) さらに、相対性理論や量子論の発展は、ニュートン物理学がある限定された自然の事象の記述にのみ妥当する一群の公理とそれから分析的に導出された一連の数学的方程式の形で表現された一般伴立的言明の「閉じた体系」の一つに外ならないことを明らかにした。

しかし、それにも拘わらず、あるいはそれ故にこそ一層、この数世紀における自然科学の発展が、われわれの自然的世界に対する確実なる知識をいかに拡大させ、その理解を深めたかをみる時、またその科学的洞察の応用が、われわれの自然的力に対する統御をいかに増大させたかをみる時、自然科学に対する現代の信頼と憧憬の念はますます高まるのである。

ところで、このような自然科学の発展に触発されて、社会的諸問題についての知識をも科学として体系化しようとする社会科学の建設の努力が始つたのは、たかだかこの一世紀のことにすぎない。オーギュスト・コント（Auguste Comte）が、フランス革命後の王政復古時代に、一方における諸自然科学の発展と産業革命に伴う産業技術の目を見張るような発展、他方における王と人民の間の厳しい政治的対立と社会的アナーキーに直面して、この政治的危機の原因を政治学における知識の後進性にもとめ、政治学が新たな社会改造のための、自然科学にみられるような信頼できる科学的な基本的組織原理を提示しえないでいる点にあると考え、緊急の課題として「今日、科学者は政治学を観察科学の段階にまで引き上げねばならない」（*les savants doivent aujourd'hui élever la politique au rang des sciences d'observation*）と訴えたのはようやく一八二二年のことであつた。(3)

もちろん、プラトンの時代からコントの時代に至るまで優に二〇〇〇年以上にわたつて、人間の社会的性格に関して多くの知識が積み重ねられてきた。これら知識は社会と国家の分裂が意識されることのなかつた歴史のこの長い時期を通じて、政治に関する考察と結びつけて論じられるのが普通であつたから、その意味で政治学とはいわばこのような人間の社会生活一般に関する諸知識の集合に冠せられた名前でもあつたのである。

しかし、これら知識には経験的な事実についての正確な記述が含まれていたとしても、その多くは個別的、断片的であり、諸事象の関連を説明する一般化には成功していなかつた。たまたま一般的定式化の形態をとつていても、実は事象を順序づける単なる分類図式に終つているか、あるいは形而上学的思弁から生みだされたレトリックによつて粉飾された類推に支えられた説明に過ぎなかつた。要するに、これら知識は正確な予測や統御の能力をもたないという点で、近代自然科学の備える根本的特性を欠いていたのである。

もちろん、これら諸知識は人間や社会的諸価値についての鋭い洞察を含んでいた。それはある種の社会的価値の選好にも

とづいた行為に対する道徳的命令であり、ユートピアの構想であつたといえよう。そして実はあの思想的綜合と体系形成への志向で特色づけられた世紀に生きるコントやそれに続くスペンサー（Herbert Spencer）やマルクス（Karl H. Marx）など同時代の社会科学の建設者たちにとつても、このような一つの世界観と、それにもとづいたあるべき社会の秩序についての構想は、彼ら自身少しも隠そうとしない彼らの社会科学建設に対する強い心理的動機を構成するものであつたのである。ただ、科学と産業の目を見張るような発展と、それにともなう激しい政治的社会的変動の時代にあつて、すでに時代の機械論的、決定論的思潮の洗礼を受けていた彼らにとつて、その主張の真理性は、まず何よりも科学によつて裏打ちされなければならなかつたし、実はその内容において同意することのできない先行する諸思想、諸観念は、それが当時の自然科学に対して信じられていたような実証性と法則性、厳密な予測性を主張しえぬという理由によつて、形而上学として斥けられなければならなかつたのである。

これら社会科学建設の先駆者たちは、何れもすべての社会問題に解答を与え、すべての社会現象を説明できるような壮大な一般的体系を構築しようと試みた。彼らは社会は単なる部分の集合以上と考える。従つて、方法上、社会はある一側面だけ取りだし、それを孤立化させて分析してみても理解できるものではなく、あくまで全体性において把握されなければならないという綜合的、全体論的立場に到達する。さらに彼らは、社会は部分はもちろん全体としてすべて歴史的変化を免れないと考える。そこから社会は歴史性を欠いた静態的構造分析によつてではなく、過去から未来へとつながる社会の運動の相において、歴史的動態的に分析されなければならないという方法的歴史主義の立場がでてくる。

彼らは又歴史を、あらかじめ定められた発展段階を追つて、先行する発展段階のどれよりも優れた、人間性の完成あるいは回復の実現する最高段階へ向つて、発展をつづけていく進歩の力動的過程とみる。そして、この実証的、科学的あるいは、社会主義的社会の到来は、動かすことのできない「社会法則」に従つて不可避に達成されるという意味で、否定するこ

とのできない科学的真理なのである。そして、この決定論的、発展段階的あるいは進化論的歴史哲学は、すべての社会現象を貫徹する歴史的法則性の発見を通じて、このユートピアの実現を予測したというまさにこの点で、社会に関する科学としての地位を獲得したと信じられたのである。(4)

今日、われわれは科学に対してこのように楽観的でもなければナイーブでもない。上にのべたような全体性と歴史性において社会を把握しようとするアプローチの方法は、カール・ポッパー(Karl R Popper)によつて「歴史主義」(historicism)と名付けられ、彼らがその方法によつて成功したと信じた予測は、実は単なる予言的託宣に外ならなかつたとして、その方法的不毛を徹底的に批判され、否定しさられたところのものである。(5) しかし、これら先駆者の思想にみられた科学観は、今日なおさまざまな形をとつて根強く生き残つているし、彼らの提起した問題そのものは依然としてわれわれの探究に絶ゆることのない刺戟を与えつづけるのである。

三

私は今日、政治学あるいは社会科学が科学でなければならないと主張される時、それは大体次の三つの意味のどれか一つ、あるいはその組合せとして考えられていると思う。第一は政治的あるいは社会的問題の探究を、科学である以上必ず満さなければならないと考えられているある厳格な規範的基準のふるいにかけることによつて、えられた知識や知識の体系の妥当性を主張しようとする立場である。そこでは探究の心理的、論理的手続きへの関心が中心となつてくる。科学化を方法のレベルでとらえているといつてもよい。つまり、政治学に科学的方法を適用することによつて、政治学の知識を科学たらしめなくてはならないというのが、この主張の真の意味なのである。

この立場はさらに、このような科学的方法は探究の対象となる事象の相違を問わず、いかなるものであれ同じ方法が適用

しうるし、又されなければならないという主張と、対象の相違によつて当然に方法は変つてくるはずだという主張にわかれる。前者は自然科学であろうと、社会科学であろうと探究の妥当化の論理にかわりのあろうはずはないという立場で、現代の科学哲学の主張するところであり、本稿も又このような見地にたつている。

さらに、科学すなわち自然科学とみたてて、あるいは自然科学をより発展した先行科学とみなして、社会問題に関する知識へもこの自然科学の方法を適用することによつて、社会に関する知識の科学化をはかろうとする主張がある。これは方法の一般性を前提としているという意味で上の変形とみてよい。この立場は論理上、自然科学の社会科学に対する科学的優位を意味するような結論にも導かれうるため、しばしば社会科学者によつて強い感情的反撥を受けてきた。しかし、歴史的にみて最も早く登場してきたのはこのような考えであつて、少くともコントやスペンサーの立場は広い意味でこの中に含まれるといつてよい。このような創世記の時代はさておき、最近に至るまでこういつた考えが最も一般的であつたのはアメリカで、ウィルソン（Woodrow Wilson）やブライス（James Bryce）といつた若干の例外はあるとしても、前世紀末から今世紀の三〇年代初頭に至るまで、バージェス（John W. Burgess）に始まるアメリカ政治学の伝統的な方法論的立場はまさにこのような系譜に属するものであつた。われわれにとつてなじみ深いベントレー（Arthur Bentley）、マンロー（William Benett Munro）、三〇年代までのキャトリン（G. E. G. Catlin）といつた諸政治学者は、かかる方法を最も明瞭に意識したそれぞれの時代の代表であつた。(6)

社会科学は自然科学とは異なる方法が用いられなければならないという立場を強く主張したのは、いわゆる新カント派ことに西南ドイツ学派の科学方法論であつた。経験科学に属する諸特殊科学は研究対象によつて自然科学と文化科学の二群にわけられる。没価値的、非了解的自然を対象とする自然科学は、一般化手続きによつて普遍的自然法則の発見を目標とする自然科学的方法をとらなくてはならない。これに対して、価値関係的、了解的存在としての文化を対象とする文化科学は、

個性化手続きによつて一回的特殊的個性叙述を目標とする歴史的方法をとる。このようなドイツ西南学派の方法論的立場を最も明確に表現した例えばリッカート（Heinrich Rickert）にみられるような主張は、[7] この議論の論理構造がどの程度明確かつ意識的に理解されているかは別として、自然科学と複雑な人間社会の諸関係を扱う社会科学とは本来当然に方法的に区別されねばならぬはずだという一般的常識と結びついて、今日なお広く一般的見解として支持されているように思われる。

新カント派の哲学運動自体は、日本を除いては、ほとんどドイツという国家的枠を越えて拡がることのなかつた、一九世紀の後半におこり、第一次大戦直後の限られた時期に最高潮に達した一つの地方的哲学運動にすぎなかつた。しかし、戦前の日本の学問がドイツの諸学問の移植という形で、その圧倒的影響の下に成長し、哲学の領域においてこの傾向はとくに著るしかつたという事情は、この新カント派、ことにマールブルク学派と西南ドイツ学派の科学方法論をして、日本の学問、とくに政治学の学風に強くその極印を残さしめるという結果となつた。

すなわち、第一次大戦後の民主主義的精神の昂揚と大正デモクラシーの下における自由の雰囲気を背景として、ようやくその驥足をのばしはじめた日本の政治学は、たちまちにして時代の所産ともいうべきマルクス主義とファシズムの厳しい挑戦に直面して、従来の方法論的自覚を欠いた素朴な実証主義的立場に対し、真剣な方法論的反省を強いられることとなつた。このような事情の下で、かつて学派の中から幾多の講壇社会主義者を輩出し、ワイマール体制下自由主義的立場を堅持しつつ、それぞれマルクス主義的唯物論と厳しく対決し、きわめて精緻な論理を発展させつつあつた新カント派諸派の科学方法論は、当時の日本の政治学界に「一種の清新さを以つて迎えられ」[8]、圧倒的影響を残しさることとなつたのである。

ことに、文化科学を構成する各個別的特殊科学は、それ独自の対象とする文化価値を明らかにすることによつてはじめて方法論的に自立しうるというその立場は、当時、ドイツ国家学の圧倒的影響の下にあつて、法学の下位科目的位置を与えられているか、あるいはオーストリヤやアングロ・サクソン諸国の政治学の影響の下に、漠然として無自覚に社会学的考察の

中に解消されようとしていた日本の政治学に、強い方法的覚醒を促したのであつた。

とくに当時イギリスやアメリカを中心に発展したバーカー（Ernest Barker）、ラスキ（Harold Laski）、コール（G.D.H.Cole）、マッキーバー（R.M. MacIver）らを代表とするいわゆる多元的国家論のもたらした経験的成果を土台に、新カント派の方法論を借りきたつて、独立の学としての政治学を打ち立てようという野心的試みを展開した新しい政治運動の旗手戸沢鉄彦教授や蠟山政道教授の諸説が、同じ新カント派の立場にたつて、この折衷から生じた概念構成の難点を鋭くつき、自からは従来の国家学より法学的概念を排除することによつて、政治学の独立をはかろうとする潮田江次教授によつて厳しく批判されるにおよんで、これは今日「政治概念論争」として知られる大論争に発展し、終戦に至るまでわが国政治学界を二分して争われたのであつた。(9)

この論争自体の評価や新カント派の科学方法論そのものに対する批判はここでは問題から外れるので別稿にゆずらねばならない。しかし、このようなわが国政治学界のもつ特殊な事情にもとづいて、新カント派の科学方法論は必ずしも自覚的にではないが、マルクス主義とならんで今日なおわが国政治学者の上に政治学の方法として深い影を落しているのである。

要するに、適用される方法がすべての経験科学において共通であるという立場をとるか、社会科学と自然科学、あるいは社会科学を構成する各個別科学において、それぞれ独自の方法論が成立するという立場をとるかの相違こそあれ、厳密な科学的方法のテストにかけることによつて、政治に関する知識を信頼にたる妥当な知識たらしめようというのが第一の立場の意味なのである。

四

第二の立場は、ある価値の選好にもとづいて構成された政治的、社会的あるいは世界観的道徳体系が科学的に真であるこ

とを明らかにすることによつて、行為の準則としてその支持を命じようとする立場である。そこでは体系の真理性を明らかにすることによつて、当為としての正当性を論証することが焦点となつてくる。科学化を価値のレベルあるいはイデオロギーのレベルでとらえているといつてもよい。政治学は正しい政治的価値体系を科学的に創り出し、あるいは選びだすことによつて、政治行動の指針とならなければならないというのが、この主張の意味するところである。

近代の多くの政治運動の過程で、実践上の必要と結びついてもとめられたものは、まさにこのような科学としての政治学であつた。今日、実践の場においてしばしば新しい政治哲学の必要が説かれている。もちろん、そこでいう政治哲学とは政治学における命題の言語分析や意味論の研究を意味しているわけではなかろう。政治行動の準則となる一つの確固たる信念の体系の確立をもとめているわけである。そして、すでに近代科学精神の洗礼をうけた現代社会にあつては、その哲学がもし一般的支持を獲得しようとするならば、単なるユートピアの描写や倫理的判断の提示、自己の確信の表明や一般的勧奨をもつてしては、大した説得的効果は期待できないであろう。終局的には妥当性に対する論理をこえた帰依が望ましいことであるとしても、少くとも入信の心理的契機としては科学としての明証性が必要とされるのである。

ところで、科学におけるかかる側面を最も強調するのは、いうまでもなくマルクス主義である。一般に現代の経験的諸科学がこのような価値の問題を研究の対象とすることを好まないという傾向があるだけに、この強調点はマルクス主義においてきわだつている。マルクス主義においてはその哲学と社会学が一体となつて一つの世界観を構成しているところにその特徴がある。いわゆる唯物弁証法が形式論理学と共に、思考の法則としての論理学を構成するとするならば、史的唯物論と剰余価値論は歴史に関する実証科学としての社会科学を支える根本理論とされている。[10] すなわち、史的唯物論がいわゆる歴史の科学的法則を明らかにした経験的理論であり、歴史分析を規定するアプローチの方法であるとするならば、剰余価値論は資本主義的生産様式の構造分析から引きだされた経験的理論として、構造分析を規定するアプローチの方法となつている。

しかし、マルクス主義はここでとどまらない。これを単なる経験的理論の枠にとどめず、さらにすすんで、この理論から社会主義の到来の歴史的必然性とプロレタリア革命の担い手としてのプロレタリアートの歴史的使命を演繹的に導出することによつて、「科学的」社会主義を体制変革のための革命の哲学たらしめようとしている。ここで例えば、歴史的必然性とプロレタリアの能動的役割、あるいは変革過程の分析における唯物史観の真理性と戦術的有効性といつた問題をめぐつて生ずる論理的混乱は問題ではない。[11] われわれが注目しなければならないのは、その道徳体系が彼らの信じたように、果して真理として論証されたかどうかということではなく、プロレタリアの

「解放事業をなしとげること、これが近代プロレタリアートの歴史的使命である。この事業の歴史的条件とその性質そのものとを探究し、以てこれを遂行する使命をもつ今日の被抑圧階級に、彼ら自身の行動の条件および性質を意識させること、これがプロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主義の任務である」[12]

「共産主義とは、プロレタリアート解放の諸条件にかんする学説である。」[13]

といつた提言にみられるような、満々たる自信の背後にひそむ「科学的真理」としての道徳の体系の政治的実践において果す役割についてのあの強い期待に対してなのである。

たしかに価値の問題は、政治学において現代哲学の諸成果の導入の最も遅れている領域の一つである。しかし、それは政治学がさまざまな政治的諸価値を含む判断に対する検討を怠ることを許すことにはならないだろう。倫理学におけるいわゆる情緒説が価値の問題を、究極において個人の決定にゆだねざるをえないことは事実である。しかし、一方、そこでは倫理現象を事実として経験的に扱う広大な領域を経験科学に託している。そして、すでに倫理学自体においても従来の情緒説をこえた新しい価値論開拓への野心的試みがなされはじめている。[14] たしかに経験科学としての政治学が自から壮大な世界観を打ち立てる時期は最早去つたといえよう。しかし、上で論じてきたような価値や当為の問題は必ずしも、しばしば考えられ

ているように、現代の経験科学としての政治学の完全な射程外にあるわけではないのである。

五

「政治学は科学でなくてはならない」という主張の第三の意味は、政治学は政治行動に関する一般法則や理論を発展させることによって、政治行動の予測と政治的環境の統御に成功するようにならなければならないということである。もつとも、この意味の中には政治学における法則や理論に対する特別の見解から、政治行動の予測あるいは少くとも政治的環境の統御という主張は除かれている場合もある。しかし、何れにしても、この言明の背後には、政治学あるいは社会科学は自然科学に著るしく立ち遅れており、とるにたる法則の発見や理論の形成にはほとんど成功していないという判断や、政治的実践、例えば選挙運動の展開に際して、工学や医学にみられるような信頼できる応用技術の開拓にきわめて無力であるといつた不満にもとづく政治学の現状に対する厳しい批判が含まれているのが普通である。

もちろん、最近の社会心理学におけるグループ・ダイナミックスや社会学における小集団研究あるいは全国的な社会調査、内容分析や大規模なシミュレーション技術の開発などは、政治学の知識を大いに深め、将来の理論化のために多くの貢献を行つた。しかしなお、原子物理学における理論体系や人口衛星の工学技術を想起する時、そこにほとんど比較にならぬような理論的落差や統御能力の格差を認めないわけにはいかないのである。

ところで、ある発見が法則化され、理論化されるためには、その過程でそれが法則あるいは理論として成立しうるというその妥当性を論証する科学方法論のテストをくぐらねばならないという意味で、これら法則や理論はその方法と密接な関係をもつ。なぜならば、そこで適用される方法によつて、その結果定立される法則や理論の性格に変化が生じうるということが予想されるからである。もちろん、われわれのように、それが科学である以上、一体何を研究対象とするものであれ、そ

の法則化や理論化の過程で、適用される方法にことさらの違いのありようはずはないという立場をとるならば、この結果定立される法則や理論の性質には何の違いもみられないであろう。

しかし、先述の方法としての科学化の部分で紹介した新カント派のように、一つの極概念として政治学あるいは社会科学のとる方法は、自然科学においてとられる方法とは対蹠的性格の相違をもつという立場をとるならば、その結果定立される法則においても又その性格に相違が生ずることになる。自然科学の目標は斉一性と繰返しを本質的特徴とする自然の生起と存在に関する普遍法則の樹立である。一方、社会科学の目標は歴史的一回性と特殊性を本質的特徴とする文化価値の個性記述にあり、特定の文化価値と関係づけることによつて、それを歴史的発展系列において記述しようとするのである。[15]

このような社会科学を対象の個性の記述として、あるいはそれを歴史的発展の系列においてとらえようとする態度は、決して狭い意味での新カント派だけにはとどまらない。果して、科学の対象となる現実をこのような自然と歴史といつた相対立する二元的視角において分析することが可能なのであろうか。実際に、対象における普遍と特殊といつた概念的区別が成り立ちうるのか、個性の記述といわれるものは論理上いかなる意味をもつのか、ここではこういつた諸問題についての批判を展開する余裕はない。われわれにとつて、政治学における法則という名辞の定義についても、このような分裂があるということを承知しておけば十分である。

最後の問題は社会科学における歴史法則の意味に関してである。社会科学を「歴史に関する実証科学」[16]と規定し、社会科学に関する法則とは「継起する諸時代を結びつける法則」としての「歴史的発展に関する法則でなければならない」[17]とする立場は、カール・ポッパーによつて「歴史主義」の名を冠せられた社会科学の立場であるが、この社会科学における理論の独自性を主張する立場こそ、広い意味での新カント派やマルクス主義を含めて従来のわが国の政治学において、最も有力な立場を形成していたものであつた。

ポッパーは歴史主義者の主張する予測とは要するに広範囲な長期的趨勢の予見にすぎないと考える。彼にしたがつて歴史主義者の立場を要約するならばつぎのようになろう。社会科学においては観察者自体が対象と同一の世界に属し、相互作用をおよぼしあつている。したがつて、もし例えばクーデターの発生の時と場所や規模とその効果が正確に予測されたとしたら、当然それに対応する手段が準備されるであろうから、恐らくクーデター自体の試みが不可能になるだろうし、少くとも予測されたような効果を達成することには失敗するだろう。その意味で、短期の精密、詳細な予測は不可能である。したがつて、社会科学は限定された領域の短期の予測やあれやこれやの技術的な政治的環境の統御にかかずらうものではなく、長期の社会の全体的変化、発展の趨勢を予見するのであり、又そこにこそ社会科学の意義がある。そしてかかる予見の検証は歴史と歴史的実践の中で果されなければならないと。

これに対して、ポッパーは、例えば台風の到来のように、その到来を阻止することのできないような大規模な事象の生起についての予測を「予言」と呼び、その到来に際して例えばこれによつて蒙る損害を最小にするような諸方策に関する「予測」とを区別し、後者の予測を社会工学と名付けて、現代の経験的社会科学の主たる理論的任務として位置づけたことは今更説明するまでもないことであろう。(18)

要するに、政治学の知識を単なる政治的規範についての思弁や単純な経験的事実の分類にとどめず、経験的世界に対する理解を促進するような理論的体系にまで発展させなければならないというのが、第三の主張の意味するところなのである。

六

以上、「政治学は科学でなければならない」という言明がなされるとき、そこで真に意味されている内容とはどのような主張であるのかという問題について若干の整理を試みてきた。第一の主張が科学としての政治学の方法に関するものである

とするならば、第二、第三の主張は科学としての政治学が奉仕すべき目標と科学の機能に関する意見としてまとめることができるであろう。

第一の立場は従来、主として非マルクス主義的政治学の研究者が関心をしめしてきた主張であり、第二、第三の立場はマルクス主義者や政治の実践の場で最も強く要望されてきたところの主張である。このような非マルクス主義的政治学者の立場は、恐らく、科学者としてまず科学的方法の習得が必要とされるといつた事情ばかりではなく、戦前の日本における自由な政治研究に対する制約や戦後の大規模な経験的研究にいつもつきまとう経済的制約、そしてドイツ的諸科学の影響によつて、研究室における思索や文献研究に重点をおいて、フィールド・ワークに必ずしも積極的でなかつたという日本の政治学の特殊な伝統にもとづくものであろう。

ところで、このような現代における政治学の科学化に対する要請に対して、科学としての政治学が採用する妥当化の論理とはどのようなものであるか、それは価値の問題をどのように扱い、どのような形で理論化をすすめ、予測と統御能力を獲得しようとしているのか、そしてかかる政治学において採用さるべきアプローチの基本的枠組はどのようなものであり、その照準点はどこに定められなければならないか、こういつた諸点についての解明が次の問題である。

(1) 戦前、政治学の科学化をめぐり、わが国政治学界を二分して争われたいわゆる「政治概念論争」において、それぞれの陣営で中心的役割を演じた論争の火付け役ともいうべき潮田江次教授と、この批判を戸沢鉄彦教授とともに受けて立つた蠟山政道教授は、のち、いずれもその著書の冒頭でつぎのように述べられた。すなわち潮田教授は昭和一九年に刊行されたこの論争集「政治の概念」(昭和一九年、慶応出版社)の序文で「政治学が今日――といつても茲では第二次世界大戦と関聯した最近の意味ではなく、専ら学問の現発達段階に於てという意味であるが――其の建て直しを必要としてをることは、恐らく誰よりも政治学者自身が一番痛切に感じて来てをるところである。　吾々がプラトーンの説く不変の真理に感歎し、アリストテレースの述べる現代的な所論に驚くのは少しも咎むべきことではないけれども、それと同時に現在の国家論や政治学が如何にプラトーンと変りがなくアリストテレース其まゝであるかに驚歎することを吾々は忘れてゐるのではないか。政治学は独立の科学としての新しい基礎づけが必要なのである。」(一頁)と論じ、蠟山教授は第二次大戦後「政治学原理」(昭和二七年、岩波全書)におい

て、当時より三〇年前「政治学の任務と対象」（大正一四年、巌松堂）を世に問うた時代を回顧して「いわゆる政治学の性質または地位について学者の間に著るしい見解の相違があり、従つてその研究方法や範囲について甚しく一致を欠いているため　『政治学は科学なりや否や』ということが激しく争われている。科学でないと認める人の中にも、それは科学としての発達が遅れている、すなわち後進性に過ぎないのであつて、科学たるべきである、という前提に立つている人が多い。著者自らを顧みて、やはり政治学の科学性の探究を目的として、或は経験的な或は現実的な社会科学としての政治学を研究しようと努めて来たのである。科学というものが真にいかなるものであるかを十分知らない我々にとつても、科学という名の魅力は圧倒的であつた」（二頁、傍点筆者）と述懐された。両教授によつて提言された「政治学の科学化」への要請は二〇年たつた現在でも依然として政治学者の取組むべき課題としてほとんどそのまま残されている。

(2) 最近のカント主義者は、カントが生前すでに非ユークリッド幾何学の成立を知つていた可能性のあることを主張しているように思われる。もちろん、カントの哲学が公理のもつ綜合的性格を正しく理解し、その上に打ち立てられていることはいうまでもないし、非ユークリッド幾何学の発見によつて、一九世紀のカント主義者たちがなんとかそれをカント哲学の体系の中に包摂するよう苦心してきたことも事実である。しかし、晩年の彼がよし非ユークリッド幾何学の論理的に成立可能なことを知つていたとしても、彼自身の哲学体系がユークリッド幾何学の物理的対象に対する絶対的な経験的妥当性を前提として打ち立てられていたということは否定されるものではないであろう。Gottfried Martin: *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, 1951. 門脇卓爾訳「カント――存在論および科学論」（昭和三七年、岩波書店）第二節。

(3) Plan des travaux scientifique nécessaires pour réorganiser la société. (*Système de politique positive*, réimpression de l'edition 1851–1881., tome quatrième et dernier, p. 77.) 土屋文吾訳「社会再組織に必要なる科学的工作案」（昭和三五年、河出書房新社）いうまでもなく、本書は元来、当時コントが秘書をしていたサン・シモン（Saint-Simon）の「産業者教義問答」の第三集として出版されるはずのものであつたが、特にコントの希望によつて彼の名で刊行することが許されたものであつた。コントとサン・シモンは本書の立場をめぐる意見の対立から袂をわかつたことになるが、コントのデビュー作ともいうべき本書は著者自身も晩年に至るまできわめて重視し、「実証哲学講座」六巻（*Cours de philosophie positive*）と並ぶ後半生の主著「実証政治学体系」四巻（*System de politique positive*）の第四巻に再録されたものであるが、そこにはすでにコントの生涯をかけて追求した研究主題とその方法、問題意識が見事に集約されている。

(4) 例えば、コントは当時の社会解体をアンシャン・レジームにおける社会的組織原理が崩壊し、新しい時代に即した組織原理がまだ確立されていないところに由来すると考える。そして、王の統治機構の側よりする社会的再組織のこころみを、社会的再組織という点では評価しつつも、それが内容においてアンシャン・レジームの復活を志向しているという点で、文明の進歩を否定し、歴史的進化の法則に逆らう暴挙と断じ、実現不可能な反動としてこれを激しく斥ける。一方、人民の社会の側よりする再組織の計画も、歴史的進化の流れに沿つているという点では王党の立場より一段進んでいるが、しかしその原理は封建社会の破壊と反動に対する批判としては有効であつても、例えば国家機能の極小化

や分断の主張にみられるように、かえつて社会的無政府状態を現出せしめ、新しい産業社会の統合原理とは到底なりえないものであり、文明の進歩の障害となると批判する。そしてこの両者にかわるものとして自然科学における諸原理と同じように、信頼できる社会再組織のための社会改造「計画の基本的観念、社会関係の基軸となる新しい原理の開発と社会の指導原則となる一般的観念体系の形成を目的とする」(*op. cit.*, p. 63)実証的理論の確立を科学者に課せられた時代の要請と考えたのであつた。このコントの直面した問題こそ、その後一〇〇年間、政治学と社会学の交錯領域における重要な論争点の一つとなつた国家対社会の対立と分裂の問題であつたわけであるが、彼の「発見」した学問の「神学的」「形而上学的」「実証的」発展段階説とは、実はこの反動的王党と人民の側のジャコバン的急進主義と産業社会における新しい社会的統合原理にそれぞれ対応させらるべく「発明」された法則であつたという点では、まさしく彼の独創であつたのである。

(5) Karl R. Popper, *The Poverty of Historicism*, 1960. 久野収・市井三郎訳「歴史主義の貧困——社会科学の方法と実践」(昭和三六年、中央公論)

——, "Prediction and Prophecy in the Social Science," in *Conjecture and Refutations ——the Growth of Scientific Knowledge*, 1963.

(6) Albert Somit & Joseph Tannenhaus, *The Development of American Political Science——From Burgess to Behaviorralism*, 1967, chapt. 1, 3, 6, 9.

(7) Heinrich Rickert, *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, 1898. 佐竹哲雄訳「文化科学と自然科学」(大正一一年、大村書店)(第三版よりの訳業)、佐竹哲雄・豊川昇訳、同名書(昭和一四年、岩波文庫)(第七版よりの訳業)

(8) 蠟山政道「日本における近代政治学の発達」(昭和二四年、実業之日本社) 一五五頁。なおこの新カント派のわが国政治学界に与えた影響については同書、第二章、第三章を参照。

(9) 多元的国家論の与えた影響および「政治概念論争」については、潮田江次「政治の概念」(昭和一九年、慶応書房)、蠟山政道、前掲書第三章を参照のこと。又この論争の過程については中村菊男「政治学」(昭和二九年、世界書院)にきわめて詳細かつ客観的に紹介されている。

(10) エンゲルス、大内兵衛訳「空想より科学へ——社会主義の発展」(昭和四一年、岩波文庫) 六〇頁。

(11) Jean-Paul Sartre, Matérialisme et Révolution —— I. Le mythé révolutionnaire, *Situation* 1949 多田道太郎訳「革命の神話」(昭和二八年、人文書院)

(12) エンゲルス、前掲書九二頁。

(13) エンゲルス、マルクス=レーニン主義研究所訳「共産主義の原理—共産主義の信条草案」(昭和二七年、大月書店) 七六頁。

(14) Robort S. Hartman, *The Structure of Value: Foundations of Scientific Axiology*, 1967.

(15) Heinrich Rickert, *op. cit*

(16) エンゲルス、前掲「空想より科学へ」六〇頁。

(17) Karl Popper, 前掲久野・市井訳「歴史主義の貧困」七〇頁。

(18) 同書、第一章、第二章。